

令和7年2月



スクールカウンセラー 中野隆治



みかん
「蜜柑」



つい最近ですが、図書室で、横須賀を舞台にした小説を取り上げた図書室作成のパンフレットに出会いました。東野圭吾^{ひがしのけいご}の『流星の絆』^{りゅうせい きずな}などとともに、芥川龍之介^{あくたがわりゅうのすけ}の『蜜柑』^{みかん}が取り上げられているのに興味を持ち、それを手にしました。それは少女が列車の窓からみかん^{みかん}を^{ほう}投げた様子などが描かれている絵本でした。

小説は、作者芥川自身を思わせる主人公が、横須賀駅から横須賀線に乗車した所から始まります。

ある^{ある}曇った冬の日暮れである。私は横須賀発上り二等客車の隅に腰を下ろして、ぼんやり発車の笛を待っていた。そして電燈^{でんとう}のついた客車の中には珍しく私の他には一人も乗客はいなかった。

こんなふう^{たいべん}に小説は始まります。主人公の心情を代弁するような寂しそうな列車内の描写から始まるのです。当時、横須賀^{かいぐんきかんがっこう}の海軍機関学校に英語の教官として勤めていた芥川^いには、「云いようのない疲労^{けんたい}と倦怠があった。」と作品で書いています。手にした新聞の夕刊の記事は、それらの気分^{たいべん}に追い打ちをかけるような退屈なものばかりでした。

そして、同じ客車に13、4才の少女が田舎つぼさを丸出しにして、主人公の前に座ります。主人公は少女の田舎じみた表情、服装、動作に不快感を覚えました。ところが、列車があるトンネルを抜け出て、踏切に差し掛かった時、少女は思わぬ行動に出ました。踏切^{さく}の柵の向こうに並んだ3人の男の子に向かって、列車の窓から、手にしたみかんをばらばらと投げたのです。たぶん、これから都会へ働きに出る少女を見送りに来た弟たちへの感謝のつもりだったのでしょう。その光景を見た主人公の心情にある変化が起きました。

私は思わず息を呑んだ。暮色^{ぼしよく}を帯びた町はずれの踏切と、小鳥のように声を挙げた三人の子供たちと、そしてその上^{らんらく}に乱落する鮮やかな蜜柑の色と。すべては汽車の窓の外に、瞬^{まばた}く暇もなく通り過ぎた。が、私の心の上には、切ないほどはっきりと、この光景が焼き付けられた。そしてそこから、或^{えたい}得体の知れない朗らかな^{ほが}気持ち^わが湧き上がって来るのを意識した。

主人公は社会や人生への倦怠感から、みかんが投げられたその一瞬に解放され、「朗らかな心持が湧き上がって」きたのです。主人公に限らず、誰でもが、この作品のような出来事と出会うことがあるかもしれません。そして、主人公のように朗らかな気分^{ほが}で、また、人生に向かっていくことが出来るのではないのでしょうか。

みなさんが図書室に足を向けることがあるなら、ぜひ、この小品を手にとって、味わってほしいと思います。高校生活の様々なプレッシャーの中で、この作品がみなさんに明るい朗らかな印象を与えることを願ってやみません。